

國學院大學学術情報リポジトリ

学生懸賞論文発表 選評

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/191

学生懸賞論文発表

第一部門 (本学文学部・神道文化学部・別科在籍者)
入選

中山 陽介 (文学部日本文学科三年)

仮名成立史上の西三条第跡出土土器墨書仮名の
位置付け

佳作

内野 真緒 (文学部日本文学科四年)

明治期の川柳と都々逸

杉山 武史 (別科神道専攻Ⅱ類二年)

神宮の子良の童女における装束の変遷

— 遷宮の記録を中心に —

第二部門 (本学大学院文学研究科・専攻科在籍者)

佳作

田中 章博 (文学研究科史学専攻博士課程前期一年)

江戸時代後期における雅楽器への価値の付加に
関する一考察

— 紀州徳川家・井伊家の所蔵の笙を中心に —
(所属・学年は、応募当時)

選評

内野 真緒 (文学部日本文学科四年Ⅱ平成二十七年年度)

明治期の川柳と都々逸 — 『團圓珍聞』の投書を中心に —

本稿は次の理由から、研究領域の水準に達しているものと評価する。

その一は、主題設定・問題意識・研究対象が目新しいこと。『團圓珍聞』は明治十年から三十年にわたって発刊された雑誌であるが、「滑稽風刺新聞雑誌」という定義付けで一括りにされるのが通常である。また研究もその編集や出版の観点や掲載される戯画の風刺の観点から、一部の作家・評論家などを含めた成果はあるものの、雑誌を支えた読者層からの視点からの考察は寡聞にして知らない。また明治期の俗文芸の川柳と都々逸の研究も、いまだ好事家や愛好家主体の領域である。当該雑誌の投書欄に載る俗文芸に注目し、その傾向の変遷を追うことにより、同時に雑誌の傾向の変遷を考察しようとする姿勢と熱意は評価しうるものである。

その二は、資料に基づき、着実に変遷の過程を論証しようとする

する姿勢が評価できる。本稿においては、第二節「前期・後期の詩歌に関する投書」第四節「『團團珍聞』後期における都々逸」に見る種々の統計表を作成し、その結果を組み立てて論を構成しようとする方法は評価しうるものである。特に「『團團珍聞』投書欄中の詩歌の投書における共通投書家数」は注目に値する。惜しまれるのは、稿者も述べているように、前期と後期のごく一部対象に限定した調査による統計であることで（勿論これだけでも傾向性は浮かびあがっており、成果は挙がっている）、この統計対象を、もう幾つかピンポイントで抽出していれば、さらに精密な論を構築・展開できたのではないかと思われる。

補足として、本稿は三十年にわたる雑誌読者層の変遷という広域の研究対象であり、いきおい文学史的・概説的な叙述が少なからず見受けられる。このことは好意的にみれば、論を成すにあたっての基礎的な調査や先行文献の精読を充分に行っている証であるが、前期・後期の掲載川柳・都々逸の証拠を増やせば、叙述により具体性をもたせることができたかと思う。

杉山 武史（別科神道専修Ⅱ類Ⅱ平成二十七年年度）
神宮の子良の童女の装束の変遷

— 遷宮の記録を中心に —

皇祖天照大御神を祀る神宮では、明治4年に神宮御改正が断行されるまで、物忌と呼ばれた童男、童女が奉仕してきた。この物忌の童男、童女は子良とも呼ばれ、それぞれ物忌父とも、祭祀の諸役に奉仕した。斎戒を重んじ清浄を貴ぶ気風から生まれてきた神役である。物忌等が務めてきた職掌は、以後主典、宮掌等の神職が務めることになるが、二十年に一度の式年遷宮の諸祭には、物忌奉仕の伝統が守られ、神宮神職の子女がこれを現在も務めている。

杉山論文は、この物忌（童女）の装束に着目し、その変遷を追いつ中世における概要を明らかにした。最も古く子良の装束が確認できるのは『延暦儀式帳』（804）で、そこに記された「明衣」（きよぎぬ）を基本として、変化変遷は確認できるが、極端に他の装束に変化することなく、本質の要素は保持されている、と結んでいる。大筋で間違いない結論を導きだせたと評価できる。古儀を尊重する神宮祭祀の伝統が、子良の装束の面でも確認できたことになる。

杉山君は、別科神道専修の学生で、都内神社に配属され、毎日神社実習を行い、夜間(6・7限)に講義を受けて二年間勉強した。研究に割ける時間はほとんどない中で、今回の論文を執筆できたことは、大変な努力があった事と推測する。別科に学ぶ学生の模範であり、他の学生の励みにもなることで、嬉しいことである。

こうした問題に注目して研究すること自体が少ない中で、先行論文をよく読み、遷宮記録に着目して調査を進めた点は、これまでにないことで、新しい展開を示している。先づ、『延暦儀式帳』を基本にして、これが『延喜式』の時代までほぼ踏襲されていることを確認している。そして当時の「明衣」がどのようなものであったか、検証し推測している。

次いで、『建久元年内宮遷宮記』(1189)の記事に着目して、当時子良(童女)の装束に二種類あった事を指摘、大物忌子良の装束は「桂・紅色の長袴、引裳、唐衣」で、他の物忌子良は「相白生裳」であり、女房装束との関わりが考えられるものへと、変化したとする。

次に『元享三年内宮遷宮記』(1323)で子良が「相、唐衣、袴」または「裳、相、懸帯」を着装していることを指摘、それがどのような装束であったかを推測している。さらに中世

戦乱期を経て、縫製においてより材料が節約できる「相」を中心にした装束への変遷を推量する。これが江戸に確立して、現代に至ったとする。

平成二十八年年度 國學院雜誌学生懸賞論文募集

- 一、応募資格…第一部門(本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者) 第二部門(大学院文学研究科・専攻科在籍者)
- 一、枚数…四〇〇字詰四〇枚〜五〇枚以内
- 一、テーマ…題目は問わない。
- 一、締切日…平成二十九年三月末日(当日消印有効)
- 一、入選…賞状ならびに副賞(五万円)
- 一、佳作…賞状ならびに副賞(三万円)
- 一、発表…入選論文およびすぐれた佳作論文は本誌に掲載予定
- 一、選考…國學院雜誌編集委員会
- 一、投稿先…國學院大學総合企画部広報課

詳しくは本誌表紙裏面を参照